

答えの出ない事態に耐える力

校長 前田 佳弘

4月6日の始業式で、子供たちに次のような話をしました。

3月2日から長いお休みになっていました。このお休みの間、私も含めて先生がたは、学校で毎日当たり前時間に時間割どおりに勉強ができ、予定どおりに行事ができるのは、どれだけ楽しくて幸せなことなのかと、改めて感じていました。ですから、先生がたは、お休みの間、早く学校が始まってほしいと願いながら、みなさんがしっかりと、安全に安心して学べるように、いろいろな準備をしてくださいました。

今日から学校を始めることはできました。けれども感染症が広がらないようにするため、みなさんにはこれまで以上に気をつけて過ごしてもらわなくてはならないことがあります。楽しみな行事や集会ができなくなることもあるかもしれません。なんだか窮屈だな、つまらないな、と感じる人もいると思います。

けれども、行動を整えたり取組み方を工夫したりすることを通して、みなさんが今までとは違うものの見方や考え方を身に付け、よりしっかりと学んだり安全に暮らしたりする力を具えてレベルアップする、そんな機会にしたいものです。

この話をして、わずかに1週間後に再び臨時休校となりました。なかなか先の見えない状況において、保護者・地域の皆様にもご心配をいただいております。

4月初め、教職員に「ネガティブ・ケイパビリティ(Negative capability)」という言葉を紹介しました。作家・精神科医の帚木蓬生さんが2017年に出した同名の著書によると、「答えの出ない事態に耐える力」、あるいは「性急に証明や理由を求めずに、懐疑の中にあることができる能力」を意味します。

今回の事態に限らず、この先の世の中は、予想できないこと、理不尽なこと、意味の分からないようなことが多くなっていくでしょう。私たちはタイムラグなしに問題を解決することが「善」だと考え、状況を捉え、仮説を立て、解決策を見出そうとしますが、それが正解かどうかすぐには分かりません。

先に挙げた帚木蓬生さんは「せっかちな見せかけの解決ではなく、共感の土台にある『負の力』がひらく、発展的な深い理解」の必要性を説いています。私たち大人も「今までとは違うものの見方や考え方を身に付け、よりしっかりと学んだり安全に暮らしたりする力を具えてレベルアップする」よう努力しなければいけないと、改めて感じています。

入学おめでとう (4月7日入学式)



4月7日、可愛らしい1年生37人が入学しました。新型コロナウイルスの感染を防ぐため、在校生は代表児童のみ参加し、入学生も保護者も座席を離して座るなど、工夫を凝らした入学式でした。

入学式で名前を呼ばれると、どの子も元気に返事をして、これからの学校生活への希望や期待が感じられました。



前田佳弘校長は、「自分の命を自分で守りましょう。友達を大切にしましょう。挨拶をして思いやりのプレゼントをしましょう。」と話し、また、松本教育長さんからは「話の聞き方が上手ですね。」と褒めていただきました。在校生の代表として6年生の米澤さんと水上さんが「歓迎の言葉」を述べ、1年生に「学校の楽しさ」を紹介すると、どの子も真剣に話を聞いていました。



式の後には、担任チームとして「1年1組の高桑裕美先生、こすもす学級の山田佐和子先生、1年2組の岸澤靖子先生」が紹介され、1年生はうれしそうに声を揃えて「よろしくお祈りします」と挨拶をしました。

37人の1年生の学校生活がスタートしました。教職員一同、心を一つにして指導していきます。保護者・地域の皆様の温かい見守り・励ましをお願いいたします。

ふるさとの花、ありがとうございました (4月10日シャクナゲの植樹)

4月10日、「福光の花しゃくなげ会」の皆さんが、旧福光町の町花シャクナゲの苗木30本を学校の「ひがし山」に植えてくださいました。同会の七山幸治会長が、本校教育後援会の得能金市会長の「子供たちに郷土愛を育みたい」という願いに応えてくださる形で実現しました。ふるさと教育の素材として、大切にしたいと思います。

